

公立小学校への英語導入に関する意識調査

北 條 礼 子*・渡 邊 由紀子**・熊 井 信 弘***

(平成14年2月6日受理)

要 旨

本研究の目的は、公立小学校への英語導入に関して、教職の有無によって意識に違いがあるかどうかを明らかにすることである。2000年9月に本学大学院1年生215名（教職経験者134名、教職未経験者81名）を対象に、27項目から成るアンケートを用いて集団調査を実施した。集計結果は、分散分析、因子分析、 χ^2 検定により分析した。その結果、公立小学校への英語導入の利点として、教職経験者は教職未経験者と比べると、英語導入によって、「内容を全体的に捉える力が伸ばせる」とも「広い視野と柔軟な思考力を養える」とも感じていないことが明らかになった。また、公立小学校への英語導入の問題点として、教職経験者、未経験者とも小学校での英語担当日本人教員の不足、1クラスの人数が多すぎることを問題点として捉えていることや、教職未経験者が地域に英語導入は当然という雰囲気があると感じていることがわかった。

KEY WORDS

小学校英語	Elementary School English	英語教育	English Education
総合的な学習の時間	Period for Integrated Study	語学教育	Language Education

1 研究の背景

2002年から公立小学校に「総合的な学習の時間」が導入される。実施内容については各小学校の自由裁量に任されているが、その中には国際理解があり、その一環として英会話が導入される可能性がある。しかし、公立小学校への英語教育導入に関して、現実にはさまざまな問題が存在している。筆者が参加している科学研究補助金（平成11～14年度）を受けての研究では小学校への英語導入に関して文献研究を継続的に行っている。その結果をみると小学校への英語導入に賛成、反対、中立的であるというそれぞれの立場がみられる一方、小学校で英語教育を行うことに消極的な教師もいることも報告されている。そこで公立小学校への英語導入を目前にして教職経験者の意識をなるべく正確に把握するため、教職経験者と教職未経験者の意識に違いがあるかどうかについて比較することが必要であると考えられる。

* 学習臨床講座

** 安塚中学校教育助手

*** 学習院大学

2 研究の目的

研究の目的は、小学校英語教育導入に関して、教職の有無によって意識に違いがあるかどうかを明らかにすることである。

3 研究の方法

3.1 調査実施時期：2000年9月

3.2 対象者：本学大学院1年生215名。内訳は、教職経験者134名、教職未経験者81名。

3.3 測定具：アンケートの27の質問項目は、北村（1997）が用いたアンケート項目の内容を参考とし、表現を一部修正したもの。アンケートの構成は、第Ⅰ部1項目、第Ⅱ部12項目、第Ⅲ部14項目という形式であり、「本当にそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階尺度形式である。

3.4 分析方法：分散分析、因子分析、 χ^2 検定

4 研究の結果と考察

4.1 小学校への英語導入について

小学校への英語導入についてまず賛成か反対かについて質問したが、その結果は表1に示すとおりである。

表1：小学校への英語導入についての回答の集計結果

	総数	賛成	中立	反対
全体	215	93(43.2%)	87(40.5%)	35(16.3%)
教職経験者	134	54(40.3%)	55(41.0%)	25(18.7%)
教職未経験者	81	39(48.1%)	32(39.5%)	10(12.4%)

表1をみると全体では総数215名中、賛成が215名中93名(43.2%)、反対が35名(16.3%)、中立が87名(40.5%)であった。教職経験の有無別では、教職経験者134名中、賛成が54名(40.3%)、反対が25名(18.7%)、中立が55名(41.0%)であった。また教職未経験者81名中、賛成が39名(48.1%)、反対が10名(12.4%)、中立が32名(39.5%)であった。

ところで、1993年にJASTEC中部地区プロジェクトチームが公立小学校教員を対象として実施したアンケート結果(JASTEC中部地区プロジェクトチーム, 1994)をみると、賛成が46.8%、反対が32.6%、中立が20.6%になっている。この調査は現在から8年前に報告された結果であり、この調査の対象者は公立小学校教員のみでその点でも今回の調査とは異なっている。この点を考慮に入れた上で参考までにこの結果と今回の結果を比較してみると、検定はしていないため印象になるが、今回の結果における賛成派はほぼ同じであるものの反対が減って中立派が増えたという傾向である。このことは小学校への英語導入の可能性が公立小学校にお

いても現実問題となり、それに関するメディア関係の報道も多くなっているのに、一応うなずける変化であるように思われる。

さらに、教職経験の有無で小学校への英語導入に賛成か反対かの違いがあるかどうかについて、分散分析を行ったが、F値は有意差はなく ($F(1,213)=1.63$)、教職経験の有無による違いはないことが明らかになった。

4.2 英語を導入する利点に関する12項目について

4.2.1 平均・標準偏差

公立小学校に英語を導入する利点に関する12項目について、対象者全体と教職経験の有無別による平均、標準偏差は以下に示す表2のとおりである。

4.2.2 分散分析結果

次に教職経験の有無別に分散分析を行ったが、その結果をまとめて示したのが表3である。表3をみると、12項目のうち、2項目において5%レベルで有意差がみられ、1項目において有意傾向がみられた。有意差があった項目は、項目9の「広い視野と柔軟な思考力を養えるから」と、項目12の「内容を全体的に捉える力が伸ばせるから」で、どちらも教職未経験者のほうが肯定的に捉えていた。ここから教職経験者は、英語に関する力以外のものが児童の身につくことについては厳しい見方、あるいは捉え方をしていることがわかった。さらに有意傾向がみられた項目は項目1の「英語のリズム感がよくなるから」であり、教育経験者の方がこの項目内容を肯定的に捉えていた。

次に、小学校への英語の導入の利点について、教職経験の有無別で、どのようにそれぞれの利点を順番づけしているかについて、分散分析を行った。その結果は表4～表5に示すとおりである。

表2：英語導入の利点に関する12項目の平均、標準偏差

項目	全体 (N=215)		教職経験者 (N=134)		教職未経験者 (N=81)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
1	3.58	1.11	3.69	1.01	3.40	1.24
2	3.78	1.09	3.78	1.03	3.79	1.19
3	3.84	0.98	3.90	0.91	3.74	1.07
4	3.59	1.05	3.60	1.05	3.58	1.04
5	3.54	1.10	3.59	1.02	3.46	1.22
6	3.53	1.24	3.60	1.24	3.40	1.23
7	3.48	1.19	3.56	1.12	3.36	1.29
8	3.69	1.16	3.73	1.15	3.62	1.16
9	2.96	1.15	2.84	1.16	3.16	1.11
10	3.08	1.10	3.00	1.07	3.22	1.14
11	3.16	1.12	3.09	1.08	3.28	1.19
12	2.71	0.98	2.59	0.98	2.90	0.95

表 3：分散分析結果（英語導入に関する利点の教職経験の有無による比較：N=215）

項目	F(1,213)	p	教職未経験者	教職経験者
1	3.48	*		<
2	0.01	ns		
3	1.38	ns		
4	0.01	ns		
5	0.73	ns		
6	1.43	ns		
7	1.45	ns		
8	0.49	ns		
9	4.06	*		>
10	2.04	ns		
11	1.51	ns		
12	5.18	*		>

*p<.05

表 4：分散分析結果（教職経験者：N=134）

要因	SS	df	MS	F
個人差	759.4011	133	5.7098	
条件	262.3352	10	23.8487	32.12**
残差	1086.2481	1463	0.7424	
全体	2107.9845	1607		**p<.01

表 5：分散分析結果（教職未経験者：N=81）

要因	SS	df	MS	F
個人差	612.9342	80	7.6617	
条件	56.9743	10	5.1795	6.62**
残差	688.9424	880	0.7828	
全体	1358.8508	971		**p<.01

項目 3，項目 2，項目 8，項目 1	項目 11，項目 10
	>
項目 6，項目 4，項目 5，項目 7	項目 9
	> 項目 12

図 1：小学校への英語教育導入の利点の順序付け（教職経験者：N=134）

表 4～表 5 の F 値がどちらも 1% レベルで有意であったので、LSD 法による多重比較を行った。その結果は教職経験者については図 1 に示すとおりであり (MSe=0.74, p<.05)，教職未経験者については全 12 項目間に有意差はみられなかった。

図 1 をみると、教職経験者は小学校に英語を導入すると、まず英語に対する語感が身につく、聞く力・話す力が自然に身につく、年齢が低いときから学ぶほうが効果的であり、英語のリズム感が身につく、外国人に対するコンプレックスや偏見をなくせ、英語に対する直感や英語らしい発音が身につく、英語を楽しく学べると感じていることがわかった。そして、次に外国文

化に関する知識が身についたり、中学校からの英語学習に役立ったり、広い視野と柔軟な思考力を養えるとはあまり思わず、最後に内容を全体的にとらえる力が伸ばせるとは感じていないことがわかった。

これに対して、教職未経験者は教職経験者と比較すると、大体同様に感じていたが、明確に小学校英語の利点に関する意識がわかれていないことも明らかになった。

以上の結果をまとめると、小学校への英語導入の利点について、教職経験者が「内容を全体的に捉える力が伸ばせるから」という項目を利点として捉えていないことが特徴的だった。

4.2.3 χ^2 検定結果

さて次に、教職経験者と未経験者別に、調査項目の結果をさらに細かく検討するため、アンケートの各項目について χ^2 検定を行った。その結果は表6に示すとおりである。

表6： χ^2 検定結果（英語導入の利点に関する12項目：教職経験者対教職未経験者）

項目	項目内容	$\chi^2(4)$	p
1	英語のリズム感	7.34	ns
2	聞く・話す力を自然に	5.54	ns
3	英語に対する語感	6.70	ns
4	英語に対する直感	1.52	ns
5	英語らしい発音	8.46	† 教職やや肯定▽ 未経験者やや肯定▲
6	コンプレックス・偏見の減少	7.02	ns
7	英語を楽しく学べる	15.93	** 教職やや肯定▽ 未経験者やや肯定▲
8	年齢が低いときから	6.58	ns
9	広い視野と柔軟性	7.31	ns
10	中学の英語に役立つ	3.97	ns
11	外国文化の知識	5.63	ns
12	内容を全体で捉える	7.50	ns

▽有意に多い ▲有意に少ない ($p<.05$)

†.05< p <.10 * p <.05 ** p <.01

χ^2 検定の結果であるが、まず第II部の「英語教育導入の利点」に関する質問項目のうち、人数の偏りが有意であったものをみると、項目5の「英語らしい発音が身につくから」では、教職経験者がそう思っている残差と、教職未経験者が「どちらともいえない」と思っている残差はプラスに有意であり、教職経験者が「どちらともいえない」、教職未経験者が「そう思う」と回答した残差はマイナスに有意であった。つまり、教職経験者は小学校段階から英語を学習すると児童は英語らしい発音が身につくやすいと積極的に感じていることがわかる。

次に項目7の「英語を楽しく学べるから」については、教職経験者の「そう思う」と答えた者の残差はプラスに有意であり、教職未経験者が答えた「そう思う」の残差は有意に少ないことが示された。ここから、教職経験者は小学校では英語が楽しく学べると思っていることがうかがえる。

4.2.4 因子分析結果

小学校に英語を導入する利点について、それぞれの特徴をつかみ、その上で教職経験の有無

により因子による違いがみられるかどうかを明らかにするため、まず対象者全体のデータを基に因子分析を行った。

小学校に英語を導入する利点に関する12項目について、共通性を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値との差に基づいて4因子解を適当と判断した。このとき4因子による累積説明率は71.31%であった。その後、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に4因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.65以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することとした。バリマクス回転後の因子パターンは表7に示すとおりである。

表7：バリマクス回転後の因子パターン（英語導入の利点について：N=215）

	因子I	因子II	因子III	因子IV	共通性
項目1	0.78770	0.14006	0.22194	-0.05659	0.69255
項目3	0.77179	0.11404	0.14693	0.31952	0.73234
項目4	0.75565	0.25274	0.05282	0.17436	0.66807
項目5	0.73569	0.12001	0.24601	0.14563	0.63737
項目2	0.72829	0.16937	0.11413	0.31306	0.67012
項目12	0.32853	0.81150	-0.07236	0.13631	0.79029
項目11	0.03688	0.79258	0.27388	0.14291	0.72499
項目9	0.25128	0.76067	0.26660	0.23031	0.76587
項目6	0.22572	0.14895	0.84129	-0.03373	0.78204
項目7	0.22400	0.18650	0.72687	0.30998	0.70939
項目10	0.17540	0.28265	-0.03116	0.77866	0.71795
項目8	0.28795	0.12164	0.30983	0.68737	0.66619

説明分散 3.24601 2.15659 1.63159 1.52298 8.55717

(注) 網掛けした数値は.65以上

因子1は、「英語のリズム感がよくなる」、「英語に関する語感が養われる」、「英語に対する直感が養われる」、「英語らしい発音が身につくやすい」、「聞く・話す力を自然に身につけられる」といった、コミュニケーション能力に関わる項目が含まれていることから、『コミュニケーション能力育成』と命名した。

因子2には、「内容を全体的にとらえる力が伸ばせる」、「外国文化に関する知識が身につく」、「広い視野と柔軟な思考力を養える」の3つの項目が含まれている。英語を言語としてだけでなく、幅広いものと捉えていることから、『思考力養成』と命名した。

因子3に含まれる2項目は、「外国人に対してのコンプレックスや偏見をなくせる」、「英語を楽しく学べるから」だった。これらの利点は英語を好意的にとらえて学習することができることから、『英語導入好意』とした。

因子4には、「中学校からの英語教育に役立つ」と「年齢が低い時から学ぶほうが効果があるから」の2項目が含まれている。小学校からの英語教育が、将来有益なものになるということを重視していることより、『将来期待型』と命名した。

さらに教職経験の有無によって違いがあるかについて検討するため因子の標準得点を求めたが、その平均と標準偏差は表8に示すとおりである。

表 8：因子標準得点の平均と標準偏差

	平均	SD (N=134)	平均	SD (N=81)
因子 1	0.073	0.928	-0.121	1.104
因子 2	-0.158	0.983	0.262	0.978
因子 3	0.111	0.971	-0.183	1.027
因子 4	-0.036	1.020	0.059	0.969

以上の因子標準得点に基づいて分散分析を行った結果、因子 2 の「思考力育成」については、教職未経験者の方が 1 % レベルで有意にそう思うことが示された ($F(1,213)=9.23, p<.01$)。因子 3 の「英語導入好意」については、5 % レベルで教職経験者が、未経験者より有意に多いという結果がみられた ($F(1,213)=4.41, p<.05$)。因子 1 と 4 については、それぞれ教職経験者と未経験者の間に有意差はなかった (因子 1 : $F(1,213)=1.91, ns$) ; 因子 2 : ($F(1,213)=0.45, ns$))。

4.3 小学校に英語を導入する際の問題点について

4.3.1 平均・標準偏差

公立小学校に英語を導入する問題点に関する 14 項目について、対象者全体と教職経験の有無別による平均、標準偏差は以下に示す表 9 のとおりである。

表 9：英語導入の問題点に関する 14 項目の平均、標準偏差

項目	全体 (N=215)		教職経験者 (N=134)		教職未経験者 (N=81)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
1	3.23	1.09	3.27	1.13	3.16	1.02
2	3.75	1.12	3.67	1.14	3.88	1.08
3	4.03	1.01	4.05	0.99	3.99	1.04
4	3.60	1.13	3.65	1.18	3.53	1.03
5	2.92	1.06	2.87	1.01	3.00	1.12
6	2.22	1.06	2.24	1.02	2.20	1.10
7	1.98	0.96	2.04	0.88	1.89	1.08
8	2.25	1.10	2.31	1.11	2.15	1.09
9	2.02	1.02	1.99	0.93	2.07	1.14
10	2.31	1.17	2.28	1.15	2.36	1.21
11	2.91	1.17	2.99	1.23	2.79	1.06
12	3.35	1.11	3.43	1.08	3.22	1.13
13	3.23	0.96	3.12	0.87	3.41	1.07
14	2.72	1.01	2.54	0.91	3.01	1.08

4.3.2 分散分析結果

アンケート第Ⅲ部の公立小学校に英語を導入する際の問題点について 14 項目について教職経験の有無別に分散分析を行ったが、その結果は表 10 に示すとおりである。表 9 をみると、14 項

目中、2項目において有意差がみられた。項目13の「両親の期待が強い」は5％レベルで、項目14の「地域に英語導入は当然という雰囲気がある」は1％レベルで有意差があり、どちらの項目も教職未経験者の方が、そのように感じていた。ただし、項目14の「地域に英語導入は当然という雰囲気がある」は平均を考え合わせると、教職経験者の平均が2.53、未経験者の平均は3.01だったので、それ程強くこの問題点を意識しているということではなかった。

表10：分散分析結果（英語導入に関する問題点の教職経験の有無による比較：N＝215）

項目	F(1,213)	p	教職未経験者	教職経験者
1	0.49	ns		
2	1.68	ns		
3	0.20	ns		
4	0.55	ns		
5	0.81	ns		
6	0.08	ns		
7	1.20	ns		
8	1.03	ns		
9	0.32	ns		
10	0.20	ns		
11	1.39	ns		
12	1.83	ns		
13	4.56	*		>
14	11.76	**		>

*p<.05

次に、小学校への英語の導入の問題点を教職経験の有無の違いでどのように順序付けしているかについて分散分析を行った。その結果は表11～表12に示すとおりである。

表11：分散分析結果（教職経験者：N＝134）

要因	SS	df	MS	F
個人差	296.7372	80	3.7092	
条件	780.9920	12	60.0763	65.50**
残差	1585.9366	1729	0.9172	
全体	2855.7159	1875		**p<.01

表12：分散分析結果（教職未経験者：N＝81）

要因	SS	df	MS	F
個人差	296.7372	80	3.7092	
条件	490.4735	12	37.7287	37.18**
残差	1055.3122	1040	1.0147	
全体	1842.5229	1133		**p<.01

表11～表12のF値がどちらも1％レベルで有意であったので、LSD法による多重比較を

行った。その結果は教職経験者については図2に示すとおりであり ($MSe=0.23$, $p<.05$), 教職未経験者については図3に示すとおりである ($MSe=0.31$, $p<.05$)。

項目 2, 項目 8, 項目 12	項目 14, 項目 8
項目 3 > 項目 1, 項目 13, 項目 11 >	項目 10, 項目 6
項目 5	項目 7, 項目 9

図2：小学校への英語教育導入の利点の順序付け（教職経験者：N=134）

項目 3	項目 4, 項目 13, 項目 12	項目 10, 項目 6
>	項目 1, 項目 14, 項目 5 >	項目 8, 項目 9
項目 2	項目 11	項目 7

図3：小学校への英語教育導入の利点の順序付け（教職未経験者：N=81）

図2をみると教職経験者は、まず「小学校で英語を担当する日本人指導者が少ない」と最も強く感じていた。さらに現在のクラスの人数が多すぎ、英語より国語をしっかりやるべきであり、協力してくれるALTが少ないと感じていた。そして同時に、必ずしも英語が時間割に入りにくいわけではなく、両親の期待は強すぎるわけでもなく、新しい教科導入は時間的に難しいというほどではなく、小学校から英語嫌いを作るとは感じていないこともわかった。最後に、地域に英語導入は当然という雰囲気があるとはいえ、「英語は中学校から始めれば十分で、中学校受験には役に立たず、民間の英語教室等へ行けば十分である」とか、子供はすぐ忘れてしまうので効果がなく、小学生には難しすぎるとか、新しい教科導入は時間的に難しいとは思っていないことがわかった。

一方、図3から教職未経験者は、小学校では英語を担当する日本人指導者が少なく、現在のクラスの人数が多すぎると最も強く感じていた。次に、小学校では英語より国語をしっかりやるべきであり、両親の期待はかなり強いと感じている。そして同時に、協力してくれるALTが少ないとか時間割に入りにくいとか、地域の英語導入は当然という雰囲気があるとか、小学校から英語嫌いをつくらせるとは必ずしも感じていず、新しい教科導入は時間的に難しいとは思っていないことがわかった。最後に、中学受験に役に立たないとか、民間の英語教室等へ行けば十分であるとか、英語は中学校から始めれば十分であるとか、小学生には難しすぎるとか、子供はすぐ忘れてしまうので効果がないとは思っていないことも明らかになった。

以上をまとめると、教職経験者、未経験者とも「小学校で英語を担当する日本人指導者が少ない」と感じていることが明らかになり、次に「現在のクラスの人数が多すぎる」とか「小学校では英語よりも国語をもっとしっかりとやるべきだ」と思っていることもわかった。これは9年前の指摘になるが、島岡（1992）があげた、「教える教師がいない」や、「40人教室形態で外国語を学習する一斉指導には、小学生は慣れていない」という小学校英語指導の疑問点を裏付ける結果となった。さらに、神山（1996）が、「言語である英語を学習する際、言語感覚に対する基盤の確立が重要であり、その為には日本語を確実にするべく国語科教育を再検討する必要がある」と英語教育導入の問題点を述べている。本調査結果でも、この主張を肯定する結果が得られている。しかし、「小学生に英語は難しすぎる」や、「子どもはすぐに忘れるので効果がない」という問題点を肯定する対象者は、本アンケート調査から少ないことが明らかになっ

た。

4.3.3 χ^2 検定結果

さらに第Ⅲ部の「英語教育導入の問題点」に関する質問項目についても χ^2 検定を行ったが、その結果は表13に示すとおりである。

表13： χ^2 検定結果（英語導入の問題点に関する14項目教職経験者対教職未経験者）

項目	項目内容	$\chi^2(2)$ p	
1	時間割に入りにくい	5.62	
2	クラス人数が多すぎる	4.10	
3	日本人指導者が少ない	8.00†	教職否定▽ 未経験者否定▲
4	英語より国語をしっかりと	10.76*	教職中立▽ 未経験者中立▲
5	英語嫌いを作る	2.31	
6	民間の英語教室等で充分	3.32	
7	すぐ忘れるので効果無し	11.50**	教職：否定▽やや否定▲ 未経験者：否定▲やや否定▽
8	中学校からでよい	1.45	
9	小学生には英語は難しい	6.45	
10	中学校受験に役立たない	2.09	
11	新しい教科導入は難しい	8.55**	教職中立▽ 未経験者中立▲
12	ALTが少ない	6.54	
13	両親の期待が強い	13.91**	教職肯定▽ 未経験者肯定▲
14	地域に英語導入に期待	15.29**	教職肯定・やや肯定▽ 未経験者肯定・野や肯定▲

▽有意に少ない ▲有意に多い ($p < .05$)

†.05 < $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

表13をみるといくつかの項目が有意差、有意傾向を示した。ここでは人数の偏りが有意であったものについて述べると、まず、項目4の「小学校では英語よりも国語をしっかりとやるべきだ」について、「どちらともいえない」と答えた教職経験者が有意に多く、教職未経験者が同様に答えた人数が有意に少ないという結果が得られた。教職経験者は必ずしも国語をしっかりとやるべきであるともやるべきであるとも感じていないことがわかる。次に項目7の「子どもはすぐに忘れてしまうので効果がない」については教職経験者、未経験者ともそう思わないことがわかったが、特に教職経験者はややそう思わない人数が有意に多く、未経験者より児童の実態を冷静に捉えている印象である。さらに項目11の「他にもたくさん学習することがあるので、新しい教科導入は時間的に難しい」に対して、教職経験者では、「どちらともいえない」と答えた人数が有意に少なく、「どちらともいえない」と感じている教職未経験者が有意に多いことが示された。ここから教職経験者は新しい教科導入を冷静に捉えていることがわかるが、この結果は、教育現場を直に知っているものとそうでないものの差がそのまま現れているものと考えられる。

最後に、項目13の「両親の期待が強い」と項目14の「地域に英語導入は当然という雰囲気がある」について、「そう思う」と答えた教職経験者が有意に少なく、逆に教職未経験者は、有意に「そう思う」人数が多いことが明らかになった。つまり、教職未経験者のほうが小学校における英語教育に対して両親の期待が強く、地域に英語導入は当然という雰囲気があると感じているが、教職経験者はそれほど強く両親の期待や雰囲気を実感していないということのようで

ある。

4.3.4 因子分析結果

小学校に英語を導入する問題点について、それぞれの特徴をつかみ、その上で教職経験の有無により因子による違いがみられるかどうかを明らかにするため、まず対象者全体のデータを基に因子分析を行った。

小学校に英語を導入する問題点に関する14項目について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて3因子解を適当と判断した。その後再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行した。3因子の累積寄与率は51.24%であった。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得たが、表14にバリマクス回転後の因子パターンを示した。

表14：バリマクス回転後の因子パターン（英語導入の問題点：N=215）

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性
項目8	0.81982	-0.16925	-0.10397	0.71156
項目9	0.79001	-0.08774	0.00481	0.63184
項目7	0.65178	-0.04004	0.24530	0.48659
項目5	0.63729	0.06003	-0.03467	0.41094
項目11	0.60812	0.22358	-0.25037	0.48248
項目6	0.59574	0.00920	0.06059	0.35867
項目4	0.52467	0.31493	-0.10346	0.38517
項目10	0.44832	0.17119	0.19532	0.26844
項目3	-0.04020	0.81965	0.05717	0.67672
項目2	0.09134	0.71519	0.06944	0.52466
項目12	-0.05041	0.64480	0.01257	0.41847
項目1	0.46295	0.53138	-0.21576	0.54325
項目13	0.02745	0.14115	0.82328	0.69846
項目14	0.00180	-0.06519	0.75668	0.57681
説明分散	3.55575	2.12575	1.49257	7.17406

(注) 網掛けされた数値は.40以上。

因子分析の結果、小学校に英語を導入する際の問題点として3因子が抽出された。

第1因子は、「中学からでも英語力をつくので小学校からやる必要はない」、「小学生に英語は難しすぎる」、「子どもはすぐに忘れてしまうので効果がない」、「小学校から英語嫌いを作る」、「他にもたくさん勉強することがあるので、新しい教科導入は時間的に厳しい」、「民間の英語教室に行けば大丈夫である」、「小学校では英語よりも国語をしっかりやるべきだ」、「中学受験に役立たない」の8項目が含まれていた。これらの項目から考えると、英語導入に関して否定的ではないことより、『英語導入肯定』と命名した。

次に第2因子には、「小学校で英語を担当する日本人指導者が少ない」、「現在のクラスの人数では多すぎる」、「協力してくれるALT（外国人講師）が少ない」、「時間割に入りにくい」の4項目が含まれていた。現在の小学校の体制に英語を導入することが物理的に困難である要素が多く含まれているため『現状困難』と命名した。

さて第3因子は、「両親の期待が強い」、「地域に英語教育は当然という雰囲気がある」の2項

目が含まれ、小学校の英語教育導入に関して周囲の期待の大きさを示していることから『周囲の期待』因子と名づけた。

さらに教職経験の有無によって違いがあるかについて検討するため因子の標準得点を求めたが、その平均と標準偏差は表15に示すとおりである。

表15：因子標準得点の平均と標準偏差

	平均	SD (N=134)	平均	SD (N=81)
因子 1	0.018	0.984	-0.030	1.032
因子 2	0.017	1.003	0.028	1.001
因子 3	-0.166	0.856	0.276	1.155

以上の因子標準得点に基づいて分散分析を行った結果、第3因子の「周囲の期待」について、教職未経験者の方が1%レベルで有意にそう思うことが示された ($F(1,213)=10.23$, $p<.01$)。第1因子と第2因子では、教職経験の有無の違いによる有意差はみられなかった(第1因子： $F(1,213)=0.11$, ns)；第2因子： $F(1,213)=0.10$, ns)。

5 今後の課題

本研究では、教職経験者とこれから教職に就くことを希望する者が公立小学校への英語教育導入に対して抱く意識にどのような違いがあるかを検討した。将来的には小学校レベルで英語教育を受けた経験者と未経験者が、中学校以降で英語を学習するときに意識の違いがあるのかどうか、またあるとしたらどのように違っているのかについても検討する予定である。

引用文献

- 神山 秀昭 1996.『国語科という教科の役割』『文学と教育』 32, 43～47.
 北村 豊太郎 1997 『アンケートに見る賛否』『小学校からの外国語教育』(樋口忠彦他編) 研究社 24～25.
 JASTEC 中部地区プロジェクトチーム 1994.『「小学校への英語教育導入について」の公立小学校教員の意識調査』『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』 13, 109-119.
 島岡 丘 1992.『小学校でも英語指導を』『児童心理』 46, 14, 1694～1699.
 上越教育大学児童英語教育研究グループ 平成11～14年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 平成11年度報告書 『公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策』
 上越教育大学児童英語教育研究グループ 平成11～14年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 平成12年度報告書 『公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策』

(本研究は、平成11～14年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策」の助成を受け、平成13年度上越英語教育学会で口頭発表した内容加筆修正をしたものである。)

付 録

調査票の項目内容は以下のとおりである。

第Ⅰ部：小学校への英語導入に賛成である。

第Ⅱ部：英語を導入する以下の利点についてあなたはどのように思いますか。

- ①英語のリズム感がよくなるから
- ②聞く・話す力を自然に身につけられるから
- ③英語に対する語感が養われるから
- ④英語に対する直感が養われるから
- ⑤英語らしい発音が身につくから
- ⑥外国人に対するコンプレックスや偏見をなくせるから
- ⑦英語を楽しく学べるから
- ⑧年齢が低いときから学ぶ方が効果があるから
- ⑨広い視野と柔軟な思考力を養えるから
- ⑩中学校からの英語学習に役立つから
- ⑪外国文化に関する知識が身につくから
- ⑫内容を全体的にとらえる力が伸ばせるから

第Ⅲ部：小学校に英語を導入する際の以下の問題点についてあなたはどのように思いますか。

- ①時間割に入りにくい
- ②現在のクラスの人数では多すぎる
- ③小学校で英語を担当する日本人指導者が少ない
- ④小学校では英語よりも国語をしっかりやるべきだ
- ⑤小学校から英語嫌いを作る
- ⑥民間の英語教室等に行けば十分である
- ⑦子どもはすぐに忘れてしまうので効果がない
- ⑧中学校からでも英語力はつくので小学校からやる必要はない
- ⑨小学生に英語は難しすぎる
- ⑩中学校受験に役立たない
- ⑪他にもたくさん学習することがあるので、新しい教科導入は時間的に難しい
- ⑫協力してくれる ALT（外国人講師）が少ない
- ⑬両親の期待が強い
- ⑭地域に英語導入は当然という雰囲気がある

A Comparative Study of the Views on the Introduction of English to Public Elementary Schools in Japan between Teachers and Teachers-to-be

Reiko HOJO*, Yukiko WATANABE**, Nobuhiro KUMAI***

Abstract

In 2002, English will be introduced to some public elementary schools as one of the alternatives under the newly started curriculum, General Studies. The purpose of this study is to compare how teachers and students in pre-service training feel about this movement. The survey was conducted in July of 2002 with 215 graduate school students of Joetsu University of Education (134 teachers and 81 teachers-to-be), using 27 questionnaire items. The data were analyzed by ANOVA, factor analysis and a chi-square test. The results revealed that: 1) teachers do not necessarily feel that English will enhance the flexibility of pupils' thinking; 2) both teachers and teachers-to-be feel that there are few Japanese teachers who could teach English at elementary school and that there are too many pupils in one class; and 3) teachers do not feel that introducing English into elementary school is strongly expected by pupils' parents and communities.

* Division of Learning Support

** Yasuzuka Junior High School

*** Gakushuin University